３５．Ｆ－０１

# 自己不一致感が及ぼす
## ――合意形成の場への影響について――

作業療法士学科夜間部

【背景】

青年期や中年期における自己一致感は対人関係に影響を与えることが明らかになっている[1]が，自己一致感が具体的な社会適応に必要な能力との関連については今まで検討されてこなかった． 尚，自己一致という概念は，自分自身が内側で感じている喜怒哀楽などのあらゆる感情や思いと，実際に表出する言葉や行動などが一致している状態を指す．そこで本研究では自己一致感が及ぼす社会適応度への影響を社会適応能力に関連する下位尺度 9 群に分けて検討し，考察することを目的とする．尚，臨床上の研究意義としては，前述した内容を追求することは臨床上での対象者や OT 自身の性格特性を分析することで，信頼関係を築く手がかりとなる他，セラピストと対象者とのコミュニケーション場面や面接時の合意形成を行う上で新たな知見をもたらすのではないかと考える．

【対象および方法】

研究方法：質問紙調査による量的研究法．対象者：本校作業療法士学科の学生 128 名（有効回答数 100 人）T 検定による量的分析．「社会的自己制御尺度」により対象者を 2 群に分け，「コーピング尺度」，「Kiss18 尺度」，「対象者の合意形成の考え方についてのオリジナル項目」の下位項目で有意差を算出し平均点の比較を行う．倫理的配慮：任意参加による匿名調査，守秘義務の厳守を書面にて説明した．回答中に答えたくない項目があった場合は中断可また，参加に同意された後でも，参加同意を撤回可とした．

【結果】

自己一致群（44 名）と自己不一致群（56 名）の 2 群の比較では Kiss18 尺度という対人関係に関する尺度において自己一致群の方が問題解決能力，トラブル対処能力，コミュニケーション能力といった下位尺度 3 群全てで有意差が認められ，平均的に高い値を示した($p<0.05$)．また，対象者との臨床現場における合意形成についてのオリジナル項目の記述項目については全体的に自己不一致群のほうが「対象者の選択や決断の理由を含めて丁寧に聴く必要がある」，「常に対象者の精神状態に配慮する」といった対象者の意思を尊重し，意見を引き出す必要があるという記述が多くみられ，自己一致群は「やる気を削がないようにするが事実は伝える必要がある」，「対象者自身の障害に対して理解を深めさせるべきである」といったセラピスト側の発言の仕方の内容や工夫についての記述が多い傾向がみられた．

【考察】

Kiss18 尺度で全体的に高い値を示した自己一致状態の人の方が対象者との合意形成は得やすいように考えられる．しかし，大石によると医療現場における合意形成の場は特殊であり，治療者の能力が高ければ高いほど指向性が働きやすく，対象者の意思や意見が反映されにくいと指摘している[2]．このことから，面接などの合意形成の場は，本来ならば信頼関係を重視した形のプロセスモデルとして捉えるべきではあるが自己一致状態の人は，前述の大石の意見を踏まえると，一つの情報共有の場として意識したイベントモデルとしてとらえる側面もまた求められるのではないだろうかと考えられる．対象者の自発的な発言を引き出すナラティブアプローチという視点に限定すれば自己不一致群は合意形成の場においてはその特性を活かしやすい傾向があると考える．

【まとめ】

セラピストが自身の特性を自己一致している群とそうでない群の 2 群のどちらかに属することを理解することは，面接場面などで対象者の合意形成場面で，対象者のリハビリテーションの方向性を決定する場面で活かすことができれば，更なる良好な関係性を築くことができると考える．

【文献】

1) 大塚翔史，網谷綾香：理想自己と現実自己のズレが学校ぎらい感情に及ぼす影響．佐賀大学文化教育学部研究論文集．15(2)，2011，299-307.

2) 大石桂子：合意形成における“意味の不確定性”．高崎健康福祉大学紀要．12，2013，1-10.